

2018年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集案内

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関する活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

書類提出期間:2018年10月1日(月)~2018年10月31日(水)17:00まで

書類提出先:学生部学生厚生課(池袋)・学生部学生厚生課(新座)・独立研究科事務室

採用発表:11月19日(月)学生部学生厚生課(池袋)奨学金掲示板、学生部学生厚生課(新座)奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定

授与式:11月末~12月上旬(予定)

(A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象:学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類:①ジェンダーフォーラム論文賞申込書*
支給額:優秀:10万円、佳作:5万円	②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
選考方法:論文審査	備考:執筆にあたってはジェンダーフォーラム「年報」投稿規定に従うこと。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー:立教大学における個人情報の取扱いについて」(<http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/privacypolicy.html>)を参照すること。

※(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課(池袋)、学生部学生課(新座)、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。
(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

2018年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金B授与者決定!

2018年度前期に行われた(B)活動・研究助成金には5件の応募があり、2018年5月14日に開催された選考委員会において、2件に助成金を授与することを決定いたしました。また、授与者には、6月4日に開催された授与式にて、和田悠所長より奨学金が授与されました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	研究課題	支給額
工藤 万里江(キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程4年)	「クィア神学における女性神学者たちの思想研究—フェミニズムとクィアの接点あるいは衝突—」	10万円
川越 菜都美(キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程前期課程2年)	「『ヤコブ原福音書』におけるマリア像—周辺諸宗教の並行モチーフとの関係をめぐって—」	10万円

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とはならず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーワーなどを開催しています。

20th ANNIVERSARY
1998-2018

開室日:毎週月曜日~金曜日

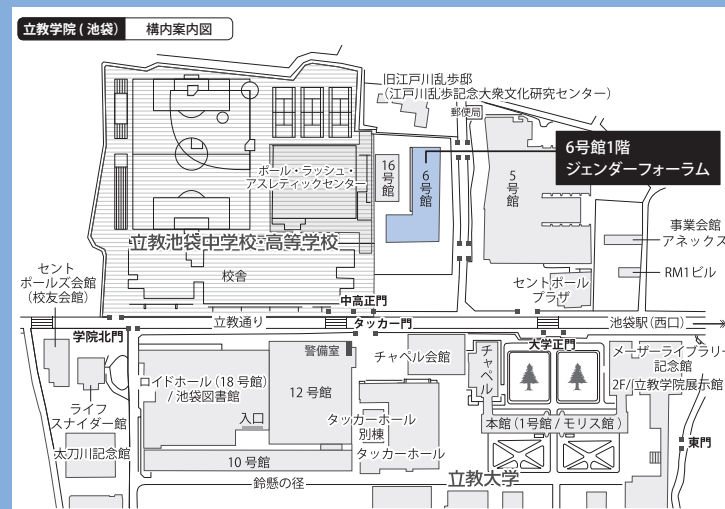
開室時間:10:00~16:00

場所:立教大学池袋キャンパス6号館1階

TEL&FAX:03-3985-2307

E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

URL:<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>

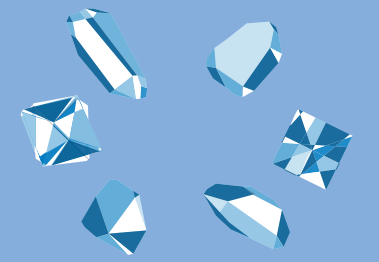


詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。

Vol.39 2018.10.1

Rikkyo Gender Forum News Letter

20th ANNIVERSARY
1998-2018



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

誰もが自分らしく生きるために ~2018年度前期ジェンダーフォーラム読書会開催報告~



(テキスト:森山至貴『LGBTを読みとく—クィア・スタディーズ入門』筑摩書房、2017年)

ジェンダーフォーラムでは新たな試みとして2017年6月より読書会をスタートさせました。2018年度は参加者のなかでセクシュアリティに関心のある人たちが多かったため、森山至貴『LGBTを読みとく—クィア・スタディーズ入門』をテキストに取り上げました。「学内問わずどなたでも参加でき、ジェンダーやセクシュアリティについて本音を交わせる場」というジェンダーフォーラムの特色のもと、前期と同様、本学の学部生・院生だけでなく他大学の学生、学外の研究者、一般市民の方々にご参加いただきました。全6回の開催で延べ50名、1回あたりの平均参加者数は約8名と、毎回大盛況のうちに終わりました。

今日、「LGBT」がブームのように語られています。しかし同書は、表向きはセクシュアル・マイノリティに好感を示しつつもその背後には偏見が潜んでいる言動の具体例を取り上げ、差別をなくすためには「良心ではなく知識が必要」だと主張しています。読書会では、メディア、教育、あるいは自身の経験においてどういった偏見を目の当たりにしたかを語り合いました。そしてセクシュアル・マイノリティへの差別をなくすため、また「LGBT」だけではないセクシュアル・マイノリティの多様性を理解するために多くの基礎概念をともに学びました。同書にはやや難解な概念も登場しましたが、参加者の間でそれぞれの知と経験が交換された結果、豊かな議論を生み出すことができました。

読書会開催期間中、日本社会ではセクシュアル・マイノリティに関する大きな出来事が二つ起こりました。一つは7月にお茶の水女子大学がトランスジェンダーの学生の受け入れを発表したこと。もう一つは、杉田水脈自民党衆議院議員が8月号の月刊誌「新潮45」で「LGBTは生産性がない」と発言したこと。セクシュアル・マイノリティの人権を保障する動きが進みつつある一方で、バックラッシュの動きも同時に起こっているといえます。その意味で今回の読書会のテーマは、意図せずして非常に時宜を得たものでした。

読書会最終回では、セクシュアル・マイノリティに対する根強い差別、セクシュアル・マイノリティ間の格差、また「人権」よりも「消費者としての存在」に注目が寄せられている現状を乗り越え、誰もが自分らしく生きていくことのできる社会をつくるためにはどうすればよいかについて話し合いました。そのためには、ジェンダー、セクシュアリティ、階級等において多様な人たちとつながる必要性が提起されました。ジェンダーフォーラム読書会がそうしたつながり形成の場となっていることを確認できたことは、とても意味のあることでした。

同書は、差別をしないためには、そして社会を変革するためには知識が必要だと強く主張しています。これからもジェンダーフォーラム読書会が、一人ひとりがお互いの存在を認め合い、耳を傾け合いながら知識を習得する「学びの共同体」(アメリカのフェミニスト文学批評家・活動家ベル・フックスのこぼれ)を育み、社会を変革していく足場となっていけたらと思います。

土野瑞穂(立教大学ジェンダーフォーラム事務局)

第74回ジェンダーセッション(2018年5月22日(火))

描かれた鏡と映し出された女たち：女性表象の可能性と不可能性をめぐって

登壇者：江崎聡子氏(立教大学アメリカ研究所特任研究員)

5月22日、江崎聡子氏による「描かれた鏡と映し出された女たち」を聴講した。印象派と言えばフランスを思い浮かべがちであるが、今回はアメリカ人の女性メアリー・カサット(1844-1926)の作品を中心に考察を加えた講演会であった。

「みる」「見る」「観る」そして「窺視する」や「眺める」。様々な言葉で表現できる行為、目玉の動きがどこを追っているのか、印象派の画家たちの視線の在り方を支配・被支配の関係から視覚言説を解き明かした興味深い内容であった。そこでは常に女性は見られる存在であり、時には描かれる存在として男性の目線しかなかったと江崎氏は指摘している。それが前・前々近代までの男女の位置関係であり、女性が自分自身を鏡で眺めるときは、古くはセバステアン・ブラント(1457-1521)『阿呆船』(1497)を引き合いに出して「自惚れという行為」といったネガティブな意味合いを持つとも江崎氏は指摘している。そこで登場するのが鏡という道具であることは言うまでもないことだが、江崎氏が主にカサットの一連の作品群を紹介しながら彼女が鏡を作中に挿入するという視点のユニークさ(鏡の反射によって、他の女性にも男性が視線を向ける視覚装置の一部として用いている点)について述べたとき、筆者は虚を突かれる思いがした。

それを打ち破る動きがシンディー・シャーマン(1954-)が制作した、まるで映画作品の意味ありげなシーンを切り取ったかのような作品群

「無題 NO・XX (ここに番号が入る)」シリーズであるとし、まさしく視覚言説をそこから紡ぎ出す一種のリマス試験紙のような作品であることを指摘したからである。重要な点は女性が20世紀中葉になって男性からの一方的な「女性は鑑賞物」という軛から解き放たれていく様子を分析していった点は画期的ですらある。

それが先述したシンディー・シャーマンの作品であるが、聴衆の一人として欲を述べるならば、視線の支配・被支配という点においてロシアのアレキサンドル・ソクーロフ(1951-)の一連の作品群も指摘して欲しかった。ソクーロフの視座はアンドレイ・タルコフスキー(1932-1986)の一連の作品にも通じる点で、男女問わず鏡越しに或いは柱越しに、そしてドア越しに誰かが誰かを見つめているという中性的視点を描いているからである。質疑応答が極めて限られた時間しかない中では、そこまでの展開に踏み込めなかった点が惜しまれるほどの中身の濃い講演会であった。

豊田雅人(本学21世紀社会デザイン研究科博士課程後期課程)

第75回ジェンダーセッション(2018年7月23日(月))

「人形」は「女の子」のものなのか：人形をめぐる近現代史

登壇者：吉良智子氏(日本学術振興会特別研究員—RPD)

吉良智子氏を講師に迎えた今回のジェンダーセッションは、日本において人形のあり方や役割がどう変化したのか、それが社会とどのように関わっていたのかを探る内容であった。ここに本講演の内容を簡潔に記すこととする。

近代化以前の日本において、人形は壮年男性の娯楽や地位を誇示する道具として用いられ、「女の子のもの」というイメージはなかった。それが変質したのは明治に入り、政府が近代化政策を推進するようになった頃である。家長の男性のもとで家事・育児に勤む女性という「良妻賢母」像は、明治政府が女性の国民化政策を行う上で形成したものであった。その「良妻賢母」教育の為に政府が利用したのが人形である。女の子に幼い頃から自分の人形のお世話をさせることで、家事・育児に勤む良妻賢母像を植え付ける。人形はこのとき、女の子向けの玩具となった。

明治の近代化政策が進み、戦時下となった日本では、また人形には「慰問人形」という役割が与えられた。少女が作った人形を兵士に届け、兵士たちはその人形を抱えて戦地に赴く。戦時下の社会では、人形は戦争の中に組み込まれた。

戦後日本では、人形は「抱き人形」から「着せ替え人形(ファッションドール)」へと、その性質を変化させた。1959年に発売されたバービー人形がその一例である。人形が、戦後日本の大量消費社会に組み込まれた結果と言えよう。日本では1967年に現タカラトミーからリカちゃん人形が発売され、爆発的人気を誇り、その人気は現在

まで続いている。

近年の人形を巡る興味深い論争に、「妊娠した人形」の話がある。2002年に「妊娠したバービー人形」が発売された時、そのバービーは結婚指輪をしておらず、夫の存在も見受けられなかったことから、「未婚の母」のイメージができ、社会的な猛反発があったこと。日本でも2001年に「妊娠したリカちゃん」が発売されたが、このリカちゃんを買くと、赤ちゃんは別で配送されるという「コウノトリ方式」であったこと。これらの話から、人形が「社会的に正しい妊娠」を世間から要請されていたことがわかる。

以上のような本講演の内容から、人形は近現代の日本において、女性に期待される社会的役割のシンボルであったと言えるだろう。また、近代化政策のひとつのツールから、兵士への慰問人形、そして大量消費社会におけるいち商品へと変質することで時代のニーズに応じて生き残ってきたように、人形はその時代の社会状況を反映するアイコン的存在であったとも言えるだろう。今回のジェンダーセッションは、社会が期待する女性像を「人形」によって実現させようとしたことが明らかになったように、一般的と思われている女性像の多くが、社会的につくられたものであることを考えさせられるものであった。まさしく「ジェンダー」が形成されゆく過程を、我々は目撃したのだ。

上 藺 英 美 理 (本学社会学部社会学科1年)

キャリアセンター勉強会報告

～テーマ：LGBT等セクシュアルマイノリティを知る・学ぶ～

立教大学キャリアセンターでは、年間8回、部内勉強会を開催している。各回テーマは様々で、毎回、学生のキャリア支援、就職支援を行う上で必要と考えるテーマを選び、社会の動向や業界・企業の情報収集を行うこと、また、学生の様子や志向を情報共有することを主な目的として開催している。今年度の第3回勉強会(2018年7月20日開催)は、「LGBT等セクシュアルマイノリティを知る・学ぶ」をテーマとした。数年前よりキャリアセンター内では本テーマを勉強する必要があるのではないかと声が多く上がっており、やっと実現することができた。本学卒業生で(株)Job Rainbow^{*1}の代表星賢人さんを講師にお迎えし、他の学生支援部局のスタッフにも声を掛けて、20名程参加の勉強会となった。お話の内容は、①LGBTとは?～性の固定観念を取り払おう～、②職場の課題とは?～今、企業にできること～、③アライになるうの三部構成で、日頃より星さんが企業・団体向けに講演をされている内容を中心に、途中、簡単なワークを入れながら進化した。「セクシュアリティは人の数だけ

無限にある」というお話では、自分自身の志向がどうであるかを参加者各人がチェックシートに記入して、「LGBTは特異な存在ではなく、自らの延長線上にいる」ことを実感しながら、セクシュアリティは人それぞれであるということを知ることができた。また、就職活動や転職活動においては、多くのセクシュアルマイノリティの方が何かしら困難を感じたことがあるとのことで、理解のない企業の対応や、理解しようとしていない人の言動や態度などの具体例についても紹介があり考えさせられた。講演の最後に、星さんに大学に求める課題を伺うと、①ロールモデルが見え難い②コミュニティがない③立教大学にはガイドラインがないのでどこに相談したら良いかわからない、などのご意見をいただいた。本学にもやるべき課題が多くあると感じた勉強会であった。

現在、キャリアセンターには、年間7,000件近くのキャリア相談がある。相談内容は就職のことに限らず、留学や進学のこと、家族のこと、友人関係のことにまで及ぶこともある。まだまだ勉強不足では

あるが、セクシュアルマイノリティの学生が来談した時に、少しでも理解し、寄り添うことができればと思う。キャリアセンターは、もともと学生にとってはハードルの高い場所(気軽には訪れにくい場所)ではあるかもしれないが、何か困ったことがあったときに相談に行ってみようと思ってもらえると嬉しい。

※1：株式会社Job Rainbowとは(HP：http://jobrainbow.net/参照)「すべてのLGBTが自分らしく働ける職場に出会えること」を目指し、2016年1月に設立されたLGBTベンチャー。自分らしく働ける職場を生み出し、その情報をすべてのLGBTに届け、実際に繋げていくために3つの事業(①LGBTしごと情報サイト②LGBT求人サイト③研修・コンサルティング)を運営している。

市川珠美(ジェンダーフォーラム運営委員/本学職員)

立教大学ジェンダーフォーラム ロゴとGemリニューアルについて

ジェンダーフォーラムは、1998年に閉館した女子寮ミツチエル館の精神を引き継いで設立されました。2018年に20周年を迎えるに際して、新たに作られたこのロゴは、フォーラム設立時から象徴的に使用されてきた“Gem”にちなみ、いろいろな形や種類の原石(gemstone)をイメージしています。同時にリニューアルした本誌と『立教大学ジェンダーフォーラム年報』の表紙・裏表紙では、ジェンダーフォーラムに集まってくる多様な人たち(原石)や考えや言葉が各々の光を放ち、その光がぶつかり反射し新たな軌跡を生み出していく様が表現されています。



Gender Forum
Rikkyo University